

# 朝日歌壇 俳壇



〈ウメⅡ〉 日高理恵子

### 馬場あき子選

☆草原の抱くモンゴルは平和なり弓、馬、相撲の文化を守りて (三浦市) 秦 孝浩  
 焼酎を呑む日々なれど煙酒を今宵は飲まん「舟唄」思ひ (観音寺市) 篠原 俊則  
 ☆姉が買ってお守りはなんと縁結びはと息を飲む母父私 (富山市) 松田 わこ  
 歌詠み始めて四年こんなにも多くの感情捨てて来たのか (五所川原市) 戸沢大二郎  
 初もうで妹の願ひ多いのか大きいのかなかなか動かない (富山市) 松田 梨子  
 年の瀬の土手下にある小屋の中ゆつたり午の座りたる見ゆ (岐阜市) 後藤 進  
 錆吹けるエッジを研ぎて雪待てば年改まり早や小正月 (仙台市) 二瓶 真  
 日の射すも綿雪ふうわり降りくれば枇杷の花むらやわらかに受く (岩沼市) 相澤 ゆき  
 ☆動くものなきアリゾナの荒野なる大岩割って初日昇り来 (アメリカ) 大竹幾久子  
 三十三度を「寒い」と言う人と歩くバナナの木の下吹き抜ける風 (東京都) 上田 結香

【評】第一首は広大なモンゴル草原でのくらしが育んだ楽しみ。弓による射的、馬術の競技、相撲などの文化をみれば、純化された楽土の相がみえる。第二首は八代亜紀追悼。多くの哀悼歌があった。第三首の下句の緊迫感がすばらしい。

### 佐佐木幸綱選

剣道のできる喜び噛み締めて冷たい床に足踏み入れる (京都府) 片山 正寛  
 マンションの外階段は螺旋状くくるくると夕映えのなか (豊中市) 夏秋 淳子  
 三木卓の詩集小説話読み最後に読むは「日本の昆虫」 (新潟市) 浜田 良男  
 ☆草原の抱くモンゴルは平和なり弓、馬、相撲の文化を守りて (三浦市) 秦 孝浩  
 湯たんぼの湯がわくまでの十分はスクワットする貴重な時間 (町田市) 河野 奉令  
 蜜蜂を借り来て放すいちご園ハウスの中の春は甘やか (三郷市) 木村 義熙  
 平和という言葉はいつも悲惨なる現実隠す白雪のごと (北名古屋) 月城 龍一  
 ろう梅が溶け落ちそなたな陽光に猫も日向で目を細めいる (葛城市) 林 増穂  
 したたかに酔へばぐるぐるの回りだす唄は舟唄いまも昔も (東京都) 浅倉 修  
 コンビニでするめを買ってワンカップ今日はそれだけ亜紀さんをしのぶ (大和郡山) 四方 護

【評】第一首、冬の剣道場の寒さと冷たさをクローズアップする。剣道好きの作者ならではの作。第二首、下句の楽しいリズムが魅力的。第三首、詩人・三木卓への追悼歌。『日本の昆虫』は氏が好きだった昆虫へのかぎりない愛を記した一冊。

### 高野公彦選

能登瓦守りて来たる半島の屋根屋根屋根と屋根衝突す (福島市) 美原 凍子  
 ☆吹雪けども能登朝市のシートぬち温とかりしよ千魚を買い (稲沢市) 伊藤 京子  
 「この下に人間が居ます」と張紙し倒壊家屋の側で待つ家族 (防府市) 山口 正子  
 家持も釈迦空も今在らば能登の地震を何と詠むらむ (町田市) 山田 道子  
 ☆健さんが倍賞千恵子の居酒屋で聞いてた八代亜紀の「舟唄」 (羽曳野市) 玉田 一成  
 ☆動くものなきアリゾナの荒野なる大岩割って初日昇り来 (アメリカ) 大竹幾久子  
 この世には飢餓死する人多いのに我ら囚人文句ばかり言う (アメリカ) 郷 隼人  
 歌の友ありとなり町より来たる楽しからずや手土産ワイン (朝霞市) 岩部 博道  
 ☆姉が買ってお守りはなんと縁結びはと息を飲む母父私 (富山市) 松田 わこ  
 正確に新しき時きさみけり傘寿祝いのデジタル時計 (我孫子市) 森住 昌弘

【評】一首目～四首目は、地震で被災した能登の人々を思う歌。多くの人々が心を寄せて、さまざまな角度から詠んでいる。「シートぬち」はシートの内、の意。五首目、人気歌手の訃報に接し、映画の一場面で流れていた唄を思い出している。

### 永田和宏選

避難所で追い込みをする受験生赤本を置くダンボールの上 (出雲市) 塩田 直也  
 ☆吹雪けども能登朝市のシートぬち温とかりしよ千魚を買い (稲沢市) 伊藤 京子  
 ぬるぬると炙った肴で真似てみるハスキーボイス沁みる冬の夜 (東京都) 佐藤 仁志  
 ☆健さんが倍賞千恵子の居酒屋で聞いてた八代亜紀の「舟唄」 (羽曳野市) 玉田 一成  
 われならば晶子、白秋、新札の一万円には茂吉を選ぶ (名古屋) 山守 美紀  
 戦禍にて生後三日で逝きし子のたった三日も人生とよぶのか (アメリカ) 大竹幾久子  
 ますますには進まぬ蛇の全身が草に隠るるまでしばし待つ (鴻巣市) 松橋 雅美  
 育ちしは海辺の村ですどうしても我が初日の出海からなのです (さいたま市) 森田 光子  
 男らしく女らしくはもう消ええ人間らしくも危ふいものだ (紀の川市) 橋本 哲次  
 教え子も中高生の母と知る六十三円最後の賀状 (北見市) 佐々木 淳

【評】塩田さん、今もなお避難が続く被災地。受験生には一層苛酷。八代亜紀さんを偲ぶ歌が多かったが、四首目は映画「駅 STATION」の一シーン。三人の固有

## うたをよむ 「月並」 宗匠たちの句

一九二九(昭和四)年に改造社から刊行された「現代日本文学全集」の第三十八篇「現代俳句集」には、百七十人の俳人の作品が並ぶ。この本の興味深いところは、冒頭に正岡子規ではなく、月の本為山から阿心庵雪人まで十七人の、「月並派」の宗匠たちの句を配したところだ。子規による「旧派」排撃以来、陳腐卑俗と退けられてきた彼らの句に私は心惹かれる。編集長を務める「俳壇」一月号でも特別企画を組んだ。

浮寝鳥見て居る雪のからず哉  
 とし立つや結びて長き箱の紐  
 春風や遅かの丘の人の声  
 棕鳥は知らぬ納豆茶漬かな  
 はつ日の出暫時あつて波ひとつ  
 俳諧の腹調へん河豚汁  
 江戸以来の俳諧に遊ぶ、滑稽に命をか  
 けようという心意気、清潔で平和な俳風  
 は、いま読んで新鮮なものがあ  
 る。これら句を、俳諧者流の「月並」と  
 一概に否定すべきではない。彼らの句に

俗臭を感じる時、そこに近代を経てきたわたし自身心の曇りや歪みがないと言いつけるだろうか。宗匠たちもまた俳句を愛し、日々俳句に向き合っていたはず。同じく俳句を愛する者として、彼らの句の豊かさに心を通わせてみたい。

正岡子規が俳句革新に動き出す前に、月並宗匠の俳句をしっかりと学んでいたことは大きな意味を持つ。高浜虚子たちの月並研究は、「月並」の意味と内容を研究し、その当時の俳句にも反省を促した点で興味を尽さない。現代の新しい月並研究がおこなわれてもよい時期ではないか。

(「俳壇」編集長)

## 風信

渡辺松男歌集「時間の神の蝸牛」 2017年7月までの未発表作を取めた第11歌集。「花とはちがふ白い狂気がうすくあるそめゆしのと空とのあはひ」(書肆俣尻房・2860円)

◇朝日歌壇 入選取り消し 2月4日付「どんぶり」で量る堅田の寒観一合二合すく売り切れては、同じ作者による類似歌がすでに発表されていたので入選を取り消します。

☆印は共選作。掲載作は記事への引用や、電子メディアやSNSへの掲載・収録をすることがあります。投稿は無地のほかき1枚に1作品、未発表の自作のみ。作品の横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝